

『公民館』一九六五年三月（全国公民館連絡協議会）

公民館活動と調査 《第二回》

矢口 新

調査問題の発生

調査は結局「見る」ということである。われわれは、毎日やっていることは、見ることでなく、目の前の問題を片づけていくということである。「見る」というのは、やっていることを一応とめて、ふり返ってみるということである。やっていることを振り返るといことは、その気さえあればいつでもできることである。やっていることのどの段階でも、やることをやめて、振り返って見るといことはなし得る。たとえば公民館報を毎月出している。これは毎月一回印刷して配付するということがきめられると、それによって、一定の仕事の筋ができて、つぎつぎにスケジュールを消化していかなくてはならない。これは見ていることではない。やることである。このやっていることを振り返ってみるのが調査である。

しかしやっていることをどうして振り返るの

であろうか。やっている限り、振り返るといことは必然的に起こってこないはずである。公民館報を毎月出していくという仕事を続けようとしている限り、そこから振り返るなどというのん気なことは起こらない。忙しいからばかりでなく、心理的な必然性もない。何かこれまでと異ったことをしようとしなければ、大体これまででのスケジュールに従い、きまつたやり方でやっているはずである。何か異ったことをやろうとするなら、ちよつと立ちどまって考えなくてはならない。これが調査問題の発生である。

何かかわつたことをやろうというのは、いろいろな動機で起こってくる。これまで公民館報を五〇〇部印刷していたのを一、〇〇〇部にしようとする。これは、これまでのやり方と異つたことである。実際問題として、部数が倍になることは、これまでどおりに配付していたのでは、配付しきれない。とすれば、これまでどお

りの配付の仕方を行っていることは許されなくなる。とすると新しい五〇〇の処理については、今までやっていたこととちがつたことをやらなくてはならぬ。そこにこれまでやっていたことはなんであつたか、をはっきりしなくてはならぬ立場に追いこまれる。これが振り返ってみるということである。そうすると、これまでの五〇〇は、どこへどう配付されていたのかというような調査が必要になる。調査しなくても、ちゃんと計画的にやっていたから、それはわかっているという場合もある。それは調査が既にしてあるということである。今までやりながら、そのやっていることを見ていたということである。それがなければ、実際に調査をして、その点を明らかにするということになる。そういうものにもとづいて、新しいつぎのやり方がきまるのであろう。否、それがきまる材料をととのえるのである。

しかし実際問題として、五〇〇部を一、〇〇〇部にするというのは、突然きまるのではない。五〇〇では都合がわるいという考えが一、〇〇〇にしようという計画を起こさせるのである。五〇〇で都合がわるいというのは五〇〇でやっているのを見る活動が行なわれているから起こってくる。つまり調査が行なわれているのである。それは調査と意識しないで行なわれているかもしれない。しかし、実際は調査なのである。自分自身のやっていることをこれでよいのか

と反省していることなのである。振り返ってみていることである。それが五〇〇部では都合がわるいという結論を出してくるのである。

しかしどうして、振り返ってみると今やっている現実を改めようという結論が出てくるのであるのか。ただ見るだけなら現実に五〇〇がつくられ、どう配付されているという事実だけが明らかになるだけのはずである。それが一、〇〇〇でなくてはならぬ、現実には改められなければならぬというのは、どうして起こってくるのであろうか。そこには、一定の理想があるからである。今五〇〇部印刷しているということの根底には、たとえば広く読ませたいといった理想がある。しかし、それが現実には常に実現されるとは限らない。たいていいろいろな条件があつて、それによって制約されている。そういう状態であることをやってみよう。その間にまた理想も具体的にかわってくる。そういう過程の中である時にふりかえってみると、自分のもっている理想と現実とのズレを発見する。そこに改めようとする気持ちが起る。

つまり調査をするというのは、自分のもっている理想を自覚して、それによってやっていることを振り返るといふことである。調査の出発点に当たっては、だから大切なことは、自分のやっていることについて、自分の理想を明らかにする。そして現実が、その理想をどれだけ実現しているか、実現していないかということ

見ることになるのである。そこから調査項目が生まれてくるのである。

調査項目をたてる

調査項目をたてるというのは、自分の頭の中で現実を分析することなのである。ちょうど医者や聴診器をあてるとおなじように、ここはどうか、ここはどうかというさぐりをいれることなのである。さぐりをいれるためには、その前提として身体について知っていないなくてはならぬ。はじめての患者ならあまりよく知らない。ただ人間の身体一般について知っている知識を土台として聴診器をあてる。もうよく知っている患者なら、もっと細かい点について聴診器をあてる。知っておれば知っているほど調べることよりも精細になる。調査というのもこれによく似ている。そして調査項目をたてるというのは、あらかじめ聴診器をあてる場所を考えるというふうなものである。調査というのは、実際に聴診器をあてて音を聞くという段階だと考えたらよい。

調査項目を考えるには、相手はなんであるかをまず頭に描かなくてはならない。たとえば前にあげた例で、公民館報の配付をもっと広くしたいというような問題の場合を考えてみる。現実が自分の理想に達していないから、もっと沢山印刷して、広くよませたいと考えるのである。五〇〇部印刷して配付しているが、それは

ちよつと考えてもあまりに少ない数だというふうなことはわかっている。少なくとも倍にしたいと考える。ここまではまだ問題をもった段階である。それでは調査をしてみようということになる。現にやっていること、行なわれていることの実態を明らかにするのである。

どう調査するか。つまりどこに聴診器をあてるとかという問題であるが、まず相手の身体をはつきり頭においてかからなくてはならぬ。この調査の場合相手の身体にあたるのはなんであるか。それは、自分が公民館報を読ませたいと思っている地域社会の人々という一かたまりの集団である。それは別に形として集団をなしているわけではないが、われわれが頭の中でそれを構成しているわけである。これを調査の対象というのである。

この対象が頭の中ではつきり描かれると、つぎは項目をたてることになる。一体その対象はどれくらいあるかというふうなことはもう既に知っている場合もあるし、知らない場合もある。それは相手の体を一とわたりなでてみるといった程度のことである。つぎには現在やっていることをはつきりとおさえることである。どこへ配付されているのか、どのだれが読んでいるのかと調べる必要がある。といつてもこの場合のどのだれというのは、いわゆる人の名前ではない。配付が地域にかたよっているということもある。地域にかた

よってはいないが、きわめてまばらであるというところもある。かたよっているとすれば、どのようなにかたよっているのか、そのかたより方を明らかにすることが必要である。それが自分の理想とのズレを明らかにして、どうするかを生み出してくるであろう。

地域的なかたより方を明らかにするというところで、考えてみるとなかなかむづかしい。漠然と地域といえばわかったような気もするが、地域とは結局人々の集団を空間的におさえたものであるから、様々なおさえ方ができる。学区というのも地域であるし、部落というのも地域である。いろいろなおさえ方がある。公民館活動の上での地域的区分もあるわけである。場合によっては、社会教育の盛んな地域とか、そうでない地域とかにわけられることもできる。

これは調査の問題と関係があるのであって、つまり聴診器をあてる患者の病気が何であるかと関係するわけである。そして調査するものが、対象をよく知っており、問題を明確に意識しておれば、そこに適切な調査の仕方がきまってくるわけである。つまりこの地域では学校区域別に配付のされ方を調べたらよいといったようなことがきまる。

地域的なかたよりはるか、それぞれの地域での分布の仕方を見なくてははいけないというようにあるかもしれない。そういうことも、対象を知っておればおぼろげはつきりとき

めることができな。もし全然知らない人がはじめてその地域で調査するとすると、こういうこともあるし、ああいうこともあるというようにいろいろ考えて、地域的なかたよりも調べるし、地域内の分散もしらべるといように両方をおさえようとする。よく知っておれば、どちらか一方しかやらない、あるいは両方ともわかっておれば両方ともやらないということになるわけである。

地域の中でどのようにまばらになっているのか、つまりだれのところへ配付されており、だれのところへ配付されていないのか。これもまた対象を知っているかいないかでは調査がかわってくる。つまり調査というのは、調査する人によって、相手がその姿をあらわにしているのである。だれといつてもどこのだれという名前ではあるまい。どういう人とか、どこに住んでいる人とかという、社会的な意味でのだけである。たとえば、職業かもしれない。あるいは社会的階層かもしれない。読ませたいすべての人に行きわたっていないとすると、行きわたっているありかたには何かのルールのようなものがあるのか、あるいは全くそんなものはない、行きあたりばったりなのか。行きあたりばったりというのも一つのルールといえればルールである。そういうことを明らかにするには、やはりなんらかの規程がなくてはならない。つまり調査するものの方の問題である。前に学

校の区域とするか、別の地域にするかといったような尺度を考えたと同じように、視点をはつきりしなくてはならない。

調査項目をたてるとは、一つは対象をはつきりさせ、それを自分の現段階でできる限りつかみ、それにもとづいて、もう一つは調査問題にもとづいて、視点をはつきりたてることだといえることができる。

調査の条件を考える

このようにして調査すべき点、つまり聴診器をあてる点が集まってくる。こういうことをやる間は、あくまで事実をどう見るといって視点を中心にして考えていくのである。つまりその点で自分の頭を整理すればよい。他のことは考えないでよい。以上のようなことを考えているときに、実際に調査する際にできるだろうか、あるいは調査票にはどんなふうに表示したらよいだろうかなどといったことは考えない方がよい。つまり一番最初に大切なことは、自分の頭の中で、できるだけ理想的な調査を考えるということである。理想的な調査というのは、なにもただ細かく詳しくということでない。自分が現にわかっていることは調べる必要はないわけである。ただ他の調査の条件はぬきにして、ともかく聴診器をあてる点だけを考えているということである。それをやる間に、途中でいろいろなことを考えがちである。それを考えると、

散漫な調査になる。素人が調査するととかく、あっちへよろよろ、こっちへよろよると筋の通らない調査になるのは、考える筋がきまつていないからである。

しかし、他の条件を考えるなどということでない。なんでもそうであるが、理想的な調査というのも実際には実現しにくい。それは聞いても答えてくれない人がいたり、経費の関係ですべて調査できないこともあるのである。それは十分考えなければならぬ。そういうことを十分考えるためには、まずはじめに、本当に理想的にやれば、どこどこへ聴診器をあてたらよいかということをはっきりしておく必要があるのである。そして、その一つ一つの調査項目について、実際に、それを実現するには、どういう条件があるのかということを検討して行くのである。つまり二段、三段構えで検討していくということが大切なのである。

なんでもそうであるが、ただ一回まわりで調査項目がきまり、調査票ができるのではない。何回も何回も、まわらなくてはならない。まず第一ラウンドは、調査問題について、筋を通して考える。つぎに第二ラウンドは、調査項目一々の項目についての視点をはっきりさせるといったことをやる。第三ラウンドで、その条件を考えるといったようになるのである。これまでの多くの調査の企画の過程を見ると、そういった考え方がすくないように思われるので

ある。

さて、そのような考え方で第三、第四ラウンドは調査項目をさまざま条件とのかみ合せで検討することをしなくてはならない。まずその第一としては、調べる方法という点から検討してみる必要がある。たとえば、公民館報を読んでいるかどうかを聞くとする。ただ配付されているだけでなく、問題は読んでいるかどうかである。それを見ることは大切な問題であるというようなことが考えられて、項目としてあげられたとする。ところでそれをどうして聞くかということになる。当り前に読んでいますかというような聞き方をして、それで答えてくれる人もいるかもしれないが、そういう聞き方をしたのでは、うそを答えるということもあるかもしれない。この程度のことなら本当をいうかもしれないが、もつとそういうことの聞きにくい調査項目があるのである。そういうことを一つ一つ検討してみる必要があるわけである。つまり具体的に、調査票がまわってきたときに、答える人は、素直にスラスラと、答えていけるようなものでなくてはならない。

それを最初の調査項目にもどって、一つ一つ検討していくのである。そうすると、項目を考えたときには、成立っていたものも方法論としては、今の社会では無理だというものも出てくるかもしれない。けずるほか仕方がないというような場合がある。

また単刀直入に聞かないで、二つ三つの調査項目を連関させて、裏から調べるということもあるかもしれない。そういうようにして調査項目の構造もまたかわってくることもあるのである。

これは人に聞くという例をあげたが、人に聞くような質問紙の調査の場合ばかりでなく、資料による調査のような場合でも、頭で考えられるが、実際には成り立たないことも多くあるのである。そういう点を調査項目の一つ一つについて検討していく。条件から考えて成り立ちにくいものはけずることになるのである。あるいは修正することもある。

そうして、調査票に表現することになる。ここで、表現の方法を工夫するのである。それには、しかし調べる事実をよほどはっきりしていないと、表現している中にかわってしまうことがある。

—未完—

> 国立教育研究所員<